

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その2)】

第1話 プロローグ： 隠された謎がいっぱい 神秘の海は“生命の母”

みなさん、こんにちは。私は生まれも育ちも、「坊ちゃん」や道後温泉などでよく知られる松山っ子です。松山東高（松山中学）もその小説のモデルになっていました。大学院以降の17年間、札幌で奮闘努力の末、こちらに転勤しました。白浜で故郷そのままの、いやそれ以上の自然の素晴らしさ、空気や水のうまさを賞味し、はや18年が過ぎました。

フィールドワークの盛んな京都大学のトレードマークにあやかり、白浜近郊はもとより和歌山県全域、さらには日本全国、世界の海へと出かけ、多様な海洋生物を研究する日々が続いています。象牙の塔だった大学も2004年からすっかり様変わりすることが決まった昨今、白浜町臨海にある瀬戸臨海実験所もすでにこの春からフィールドワークに焦点をあ

てた教育研究機関として組織が再編成されたばかりです。このフィールド科学教育研究センターは、全体では、無脊椎動物から脊椎動物および森や里の植物までさまざまな専門家でカバーできる研究が、人間生活とも関わり合わせながら、個々に、あるいは共同で進められています。これからは、ますます地域に根ざしながらも日本全土、そして世界へむけた多角的な発展が必要となっています。そういった事情も鑑みながら、人の暖かさ・清潔・安全で信頼できるお国柄で、海・山に囲まれた素晴らしい自然が残っている大好きな島国、日本、とりわけ日々の暮らしを有意義に過ごしている南紀白浜から発信したいと思います。世界を旅するごとに日本のよさは実感を伴って、ますます確固としたものになっています。本稿では、そのような人生の旅の途中で私が出会った有名・無名の生物や人物に登場してもらい、現在進行中のリアルタイムな話題として提供したいと考えています。

(1) 私の生物観察日課

私は、日課として、瀬戸臨海実験所の周辺海域で生物探査をしており、めくるめく発見もしばしばあります。まだまだ隠された謎はいっぱい残っています。具体的には、瀬戸臨海実験所のすぐ目の前の、通称「北浜」でシュノーケリングによるクラゲ類を中心としたいわゆる腔腸動物の観察・調査や、漂着したクラゲ類その他さまざまな生物たちの素性調べなどを行っています。また、すぐ近くの漁港にも通って、そこで出会えるクラゲ類や生物たちもノートにつけています。さらにはプランクトンネットを曳いて採取したクラゲ類などを実験室で飼育し、精子や卵といった配偶子からアダルトまでの一生の変化を日々追っています。日に日に変化してゆくクラゲたちの形、いわゆる変態の紹介もしたいと思います。

(2) 究極の研究目的

私の究極の研究目的が二つあります。「種の起源」と「生命の神秘」の解明です。生物にはとても深遠な謎が隠されています。生きていることはどういうことでしょうか？また、気の遠くなるような年代のうちに種がどのように変化していくのでしょうか？海は宝箱でこの謎を解く鍵があり、海の生物に知られざる神秘が秘められているのです。生命の母なるゆえんです。そのきわめつけをこのシリーズの最初に紹介しましょう。それは、世界中の多細胞動物では、ただ1種、繰り返し「若返る」ことができる、いわゆる不老不死の生物で、私が研究の専門にしているベニクラゲです。ベニクラゲを含むヒドロクラゲ類を中心とした生物学的な話も展開したいと思っています。生物たちのもつ不思議な能力や生命力はもとより、その種の一生の話も織り交ぜ、生命の謎に迫ってみましょう。

小学生の皆さんからお母さんお父さん、おじいさん、おばあさん、友人・知人仲間まで、ごいっしょに読んで下さい。そして、「自分も現場に出向いて同じようにやってみよう」、「記録をつけてみよう」という気持ちがわいてきたら嬉しいです。さらには、自然保護・保全への橋渡しの材料にしたり、生物学者や哲学者を目指すきっかけになれば望外の喜び

です。とりあえずは週1回のペースで話を進めます。時には過去に遡ったり、日本各地や世界の海からの報告も交えることになるでしょう。何が飛び出してくるか、どうか楽しみにして下さい。

瀬戸臨海実験所には素敵な水族館もあります。ここには年間700種もの海洋生物が約9000個体・群体も飼育・展示・解説されています。潜水しないと出会えないような生物たち、深みに生息する種族が、水槽でゆうゆうと暮らしています。生息環境を縮小コピー風に再現した3水槽もあります。また特集展示コーナーでは、ベニクラゲはじめ多様な動物分類群の代表種を標本で展示しています。ここでは、私が撮影した不思議なクラゲ類や漂着動物などの写真も楽しめます。水族館からの紹介も随時入れていきたいと思っています。

(つづく)